

ピエール・ロティとポール・ゴーギャン

岡谷 公二

タヒチと言えばゴーギャンだが、一九世紀において、この魅力的な土地を形象化した人間にもう一人ピエール・ロティがいる。彼の『ロティの結婚』（一八八〇）は、ゴーギャンのタヒチ行と『ノア・ノア』¹に影響を与えていると思われるにもかかわらず、この二人が並べて論じられることはきわめて少い。本稿の目的は、この影響関係を明らかにするとともに、ロティが体現していたエグゾティスムという風潮に、もう一度人々の関心を促すことである。

筆者はこれまでロティの愛読者だったことはない。彼の日本をテーマとした『お菊さん』（一八八七）や『秋の日本』（一八八九）は勿論、トルコのハレムの女性との恋を扱った処女作『アジャデ』（一八七九）、『ロティの結婚』、『アフリカ

騎兵』（一八八一）、『氷島の漁夫』（一八八六）などを読み、その繊細な文章にいくらか心惹かれはしたものの、ただそれだけのことだった。しかし私の私淑する画家・文人、ゴーギャン、ゴッホ、アンリ・ルソー、レーモン・ルーセルらが皆ロティの愛読者であるか、彼と深いかわりを持つかしているのか、²以前から気になる存在であった。

一昨年、フランスに滞在していた折、大西洋岸の町ロシュフォールにあるロティの生家をたまたま訪ねたことがきっかけになって、少しロティのことを調べてみようと思い立った。ちなみにこの生家は、彼が海軍を退役した後、晩年の日々を送ったところで、彼はもとの家に大改造を加え、一生の旅の記憶を再現せんとし、田舎町の、外見はまことに平凡な住居を驚くべき綺想の館に作り変えていて、一見の価値がある。

とりわけシリアのダマスクスの、火事で半ば焼けたモスクをそのまま買いとって移築したという部屋は、バラ色と白の大理石の柱といい、目のさめるような青のモザイクといい、みごとなものだ。

生前一世を風靡し、一八九一年にはアカデミー・フランセーズの最年少の会員に選ばれたにもかかわらず、今日ロティの声価は地に落ちていて、という感が深い。それが端的にわかるのが、古本の値段である。セーヌの河岸の古本屋でロティの本を漁ると、その値段は、いつも私の予想をはるかに下まわった。安さという点では、アナトール・フランスと双壁だった。この二人がモリス・バレスともにシュルレアリストたちに罵倒されたことはよく知られているが、これはシュルレアリストたちが活躍しはじめた一九二〇年代において、二人が既成の世代を代表する作家だった、ということと



図1 ビエール・ロティ

ある。パリの南はずれ、ブランシオン通りの屠殺場あとで週末ごとに開かれる古書市では、私は、十九世紀末から二十世紀はじめにかけてカルマン・レヴィ社から出た浩瀚な彼の全集の端本五冊を、それぞれ十フラン（二百円）で手に入れた。まさにぞつき本扱いだった。

現在におけるロティの不評は、彼の作品の質自体より、エグジスムの退潮から来ていると考えられる。

十九世紀半ば以来、西欧の列強は、あらそって植民地を拡大した。そしてこれまで人々の視野の外にあったオセアニア、アフリカ、中南米などの国々の物珍しい有様が、軍人——ロティもその一人だった——、宣教師、役人らの手によって西欧にもたらされた。そして銅版画の挿絵入りでそうした情報を満載した『マガザン・ピトレスク』や『イリュストラシオン』といった雑誌が人々の夢をはぐくんだ。また、こうした熱帯、亜熱帯の土地の、肌色の異なった人々や、奇異な産物や什器をまのあたりにすることのできる万国博覧会は、夢の焰を一層燃え上がらせた。こうしてエグジスムという、西欧を大きく動かす風潮が生まれたのである。この風潮がどれほどの力を持ち得たかの例を一つあげよう。

一八七九年九月十五日、すなわちロティのタヒチ滞在の七年後、ゴーギャンのタヒチ行の十二年前、二百人近い男女を乗せた一艘の船がオランダの港フリシンゲンから、南太平洋、

ニューギニアの東端に近いビスマーク諸島に向けて出航した。彼らは、南海に「新しいフランス」なる楽園の建設を夢みた、誇大妄想狂のフランス人シャルル・デュプレイユ侯爵なる人物の誘いに乗り、ヨーロッパでの財産を処分して企てに参加した人たちだった。当時全く未開で、瘴癘の地だったビスマーク諸島の一つ、ニュー・アイルランド島に上陸した彼らは、たちまち熱病と飢えのために次々と死に、企てはあえなく挫折する。

これは、フランスの女流ノンフィクション作家クリステル・ムシャルが近年、シドニーとキャンベラの古文書館の古文書を渉猟して掘りおこし、『海賊たちの女王』の中で公にした実話である。彼女は次のように書く。「もつとも驚くべきは、出発前に誰一人として侯爵の話の真偽を確かめようとしなかったことである」

この実話は、当時西欧の人々が抱いていた南方憧憬がどれほどのものであったかを示している。実際ハーマン・メルヴィルが言うように、この時代の「万人の胸には一つのタヒチが横たわって」いたのだった。こうした人々の渴望に、ロティはよくこたえた作家はいない。

しかし、二十世紀に入って、植民地のおぞましい実態が明らかになるにつれ、エグゾティスムの夢は呆気なく消え去った。それと同時にロティを代表とするエグゾティスムの

作家たちは、植民地支配を美化したとして、きびしく断罪されるに至った。

私はこれまで未読の『わが弟分イヴ』（一八八三）、『或る子供物語』（一八九〇）、『憐みと死の書』（一八九二）、『少年期』（一九一九）などを読んでみて、ロティの今日の評価は不当だという思いを深くした。

ロティは、世の風潮に便乗したわけではない。書くとは彼にとって、おのれの生きた時間を紙に定着させることであり、その心にまといついて離れぬ記憶やイメージを悪魔祓いすることである。彼はただ書きたいことを書いたにすぎない。エグゾティスムの作家とは、世間が彼の意に反して作りあげた像と言うことができる。ブリュノ・ヴェルシェが「驚くべきは、彼が忘れられたことではなく、あれほど有名だったことだ⁵」と言っているのは正しい。エグゾティスムの作家というレッテルは脇に置き、自伝作家、ヒューマンドキュメントの記録著、民族誌学の先駆者としてロティをもう一度読み直すべき時が来ているというのが私の意見である。

ピエール・ロティ（一八五〇—一九二三）とポール・ゴーギャン（一八四八—一九〇三）とは全くの同時代人である。二人に面識があったかどうかは分からないが、少なくとも二人の描く人生の軌道は、或る一時期急接近している。一八七



図2 海軍少尉のピエール・ロティ

〇年、海軍少尉に任官したロティ——本名ジュリアン・ヴィオー——は、普仏戦争の勃発と同時にコルベット艦「ドクレス」号に乗船して、北海の警備に当たった。一方一八六五年から南米航路の船員だったゴーギャンは、一八六八年兵役につくと同時に海軍に入り、普仏戦争勃発時には、コルベット艦「ジェローム・ナポレオン」号に配属されて、やはりバルト海の偵察の任についている。しかもこの二つのコルベット艦は、ブエーヴィローメ伯爵とともに提督としていただいていたのである。「二人はたぶん軍港シェルブルで出会ったかもしれない」とデヴィッド・スイートマンは近著『ゴーギャン伝』(一九九五)の中で言う。しかしたとえ会ったとしても、二等水兵のゴーギャンが、この二歳年下の、「芸術家的素質を持つ、虚弱体質の、甘やかされた子供」である紅顔の

少年士官に共感を抱いたとは考えにくい。

ゴーギャンは、流行作家のロティを知っていて、『ロティの結婚』をはじめ、その作品をいくつか読んでいたのは確かだが、ロティの方ではゴーギャンのことを知っていたかどうかは不明である。

海軍士官でありながらサーカスの芸人として曲芸を演じるほど多才の人間だったロティは、デッサンもよくした。実際「イースター島紀行」をはじめとする彼の初期の文章は、彼自身の手になる挿絵入りで、『イリュストラシオン』誌に掲載されたのであり、レスリー・ブランチは、「彼のデッサンは、もっと野心的な油絵同様、玄人はだしのものであった。

彼は、筆と鉛筆とで自己表現することのできた、ヴィクトル・ユゴー、レールモントフ、ミュッセ、サッカレー、フロマンタンら十九世紀の文人の仲間の一人である」とさえ書いている。私は所蔵していないが、パリの書店でかつてロティの画集を見たことがある。彼はタヒチでも勿論デッサンや水彩を描いていて、一八八〇年カルマン・レヴィ社から出た『ロティの結婚』の初版本は、三十三点のロティのデッサンで飾られていた。これらのデッサンは、独創性には欠けるけれども、繊細で、情感がこもっていて、巧みなものだ。

しかしロティは、同時代の文学に対すると同様、同時代の絵画にも全く関心を払わなかった。彼の著作、日記、手紙に



図3 ロティのデッサン ララフ

は、画家の名前はほとんど出てこない。尤も彼は一九二三年まで生きていて、そのころにはゴーギャンの名声はひろくゆき渡っていたから、彼の鍾愛の地タヒチを描いた画家として、名前くらいは知っていただろうし、その作品をいくつか見た可能性はある。

『ロティの結婚』は最初、ジュリエット・アダン夫人の主宰する『ヌヴェル・ルヴュ』誌一八八〇年一、二月号に二回にわたって連載され、前述のように、同年カルマン・レヴィ社から単行本として出版された。ロティは前年『アジャデ』を公にしていたが、こちらの方は世評が芳しくなく、それゆえアダン夫人も、出版社も、『ロティの結婚』の成功には大し

て期待を抱いていなかった。しかし発売早々から売れに売れ、ロティはたちまち流行作家となり、『アジャデ』の方もおかげで増刷を重ね、ララフのリボンやロティのボンボンまで売り出されたという。当初作者の名前は明らかにされず、『アジャデ』の作者」としか本には記されていなかったため、一層読者の好奇心を唆り、それがまた売り上げをのばしたのである。

『ロティの結婚』は戦前は津田穰訳で岩波文庫に入っていて、日本でもよく読まれたが、現在は絶版で、入手し難い。それゆえごく簡単に内容を紹介しておこう（この小説の引用は岩波文庫版によっている）。

これは、タヒチに寄港したイギリスの軍艦の乗員で、パベートルでは土地の人々からロティ——マオリ語で花の名——という愛称で呼ばれていた海軍士官ハリー・グラントと十四歳になるマオリ族の娘ララフとの恋物語である。

兄がやはり海軍士官として四年間タヒチに在住したことがあり、ポマレ女王にも寵愛されていたので、ロティは宮廷で好遇された。一方マオリ語に通じていた彼は、土地の娘たちとも親しく、或る日彼女らと遊びに行った森の中の水浴び場でララフと知り合った。彼女は、村の貧しい娘だったが、長い豊かな髪と、真白な歯と、小柄ながら驚くほど均整のとれた体と、美しい歌声の持主だった。二人はやがて愛し合うよ

うになり、王宮の近くの一軒家で同棲した。しかしロティはいつか帰国しなければならず、この不可避の別離が、二人の生活を不安にした。しかもラフはヨーロッパ人が持ち込んだ結核に感染していて、すでに軽い咳をしはじめていた。ロティが去ったら、ラフは自暴自棄になって身を持ち崩すだろう、という親友の予言が、ロティを悩ませた。

やがてロティの軍艦は十ヶ月のアメリカ巡航へと出発する。その帰途再び船はパペーテに寄港したが、滞在の日数は限られていた。しかしラフとともにすべきこの貴重な時間を割いても、ロティは、兄が土地の娘との間になしたという子供に一目会いに、荒海を冒してモオレア島への旅をせずにはいられなかった。しかし島に行ってみると、その子供は兄の子ではないと分って、ロティは落胆する。

イギリスに帰国したロティは、彼を恋慕うラフの手紙を何通も受けとるが、やがてそれも途絶える。そしてロティは人づてにラフが一時フランスの海軍士官の女となったものの鬱々として楽しまず、火酒をあおって病勢を早め、十八歳で死んだことを知らされる。

御覽の通り、筋立てはまことに単純、というより平凡で、感傷的でさえある。その上兄の子に会いにゆく末尾の部分は、作者が強調してきたロティのラフに対する愛情を裏切るものであり、心理的必然性に乏しい。

ロティのほとんどすべての作品にあつて、小説的趣向を凝らした部分は、陳腐である。二流作家だという彼に対する評価は、そういうところから来ている。しかし彼にとって、筋立ても、構成も、人物の造型も、心理描写も意に介するところではなかった。本筋とは全く関係ない挿話や記述の多い、断章をつなぎ合わせてゆくその書き振りにそのことははっきりあらわれている。だから体に合わない服を脱ぎ捨てるように、こうした趣向を捨て去った時、彼の作品は、今日の鑑賞に十分堪え得る新鮮な輝きを放つ。『或る子供の物語』という自伝小説はその一例だ。

ロティの作品の多くがその日記をもとにして書かれていることが、今日判明している。『ロティの結婚』の中でも、ロティの日記なるものが数カ所引用されているが、私自身、実際の彼の日記と引き合わせてみて、あまり改変が施されていないことを確認した。また実際の日記の中の事実が、そのまま作品の中にとり入れられている箇所が多いのにも驚いた。この点から、彼の作品の大方は、自伝小説だと断じることができる¹⁰。

こうした読み方をする時、兄の子に会いにゆくくだりが、少なくともロティ自身にとって心理的必然性があつたことが分る。

ロティより十四歳年上の兄ギュスターヴ・ヴィオーは、海

軍の軍医であり、後年のロティ同様、世界各地をへめぐり、タヒチには一八五九年から一八六一年まで三年間滞在し、マオリの少女ラタフ——『ロティの結婚』の中のタイハマ——を知り、子を作った。後インドシナで病を得て、故国へ運ばれる途中船中で死去し、インド洋で水葬に付された¹¹。

この兄は、弟ジュリアンの精神形成に大きな影響を与えた。弟の心にエグゼティスムの種をまいたのは明らかに兄である。タヒチに旅立つ前、兄は沢山の挿し絵の入った『ポリネシアの旅』という本を呉れた。「それは私が幼年期に愛した唯一の本だ」とロティは『或る子供の物語』の中で書いている。やがて彼は海と異国にあこがれ、兄同様海軍に入る。彼の兄に対する愛情は、すでに任官してインド洋を航海する船に乗っていた時、艦長に頼んで兄が水葬に付された場所——兄が乗っていた船の航海日誌によって、その正確な緯度と経度が分っていた——をわざわざ通ってもらったほどだった¹²。

だから『ロティの結婚』の核の部分とは、ロティとララフの恋などではない。その恋が背景をなすタヒチという風土そのものである。ロティの小説では、常に土地が主役だ。この作品でも、ロティとララフの影の薄い恋に比べ、末期のボマレ王朝の宮廷の有様、滅びゆくマリオ族の姿、ポリネシアの森の真昼の深い静けさ、環礁にかこまれた色鮮やかな海の寂寥、島の闇の深さがいきいきと描かれていて読者を捉える。

同じタヒチを扱っているのだから当然といえば当然だが、『ロティの結婚』には、ゴーギャンの世界と共通するところが多い。

たとえばボマレ王朝の宮廷。ロティが滞在していたのは、女王ボマレ四世の時代だった。すでにタヒチはフランスの保護領と化しており、宮廷には頹廃と衰滅の気配が忍び入って、ロティの筆は、そうした雰囲気をもごとに描き出している。

一八九一年、ロティより十九年後にタヒチを訪れたゴーギャンは、パペーテ到着三日後の六月十二日に、タヒチ最後の王ボマレ五世の計を知った。『ノア・ノア』の冒頭に、この王の葬儀の場面がある。『ロティの結婚』を読んでたからこそ、彼にはこの葬儀がひとしお印象的だったにちがいない。

ロティもゴーギャンとともに植民地文化に対し深い嫌悪を示している。ロティが「私たちのあのばかげた植民地文化。私たちのあらゆる因襲、あらゆる習慣、あらゆる不徳が入りこみ過ぎていて、野趣はまったく過去の習俗、伝統とともに地を払っている」と書けば、ゴーギャンは、まるで唱和でも

するかのように「王がいなくなり、彼とともにマオリの風習の最後の名残りが消えた。全く終わりだ。あとに残ったのは文明人だけだ。こんなものを求めて遠路をやってきたのだと

思うと私は悲しかった」(『ノア・ノア』)と言う。

ロティは王宮の舞踏会で背後から「la ora na, Loti!」(今晩は、ロティ)と呼びかけられ、振り向いてそこにラフを見出し、驚いて「la ora na, Rarahu」と答える。「la ora na」はごく普通のマオリの挨拶の言葉なのだから、ここでとりあげるまでもないことも知れないが、私はゴーギャンの第一次タヒチ滞在中の名作「la orana Maria」(一九九一)を連想せずにはいられない。

私たちは、やはり第一次タヒチ滞在の際、ゴーギャンが「Manao Tupapau」(死霊は見守る)(一九九二)という大

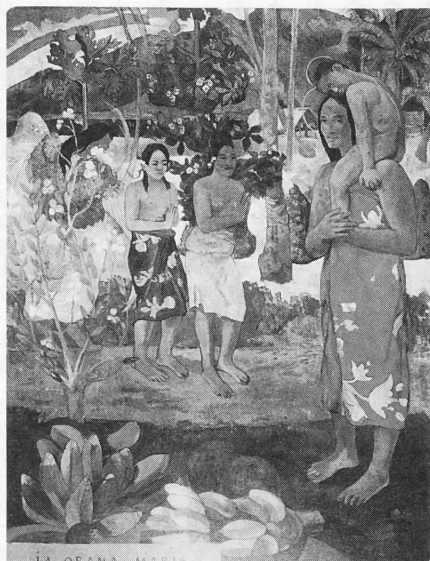


図4 ゴーギャン イア・オラナ・マリア

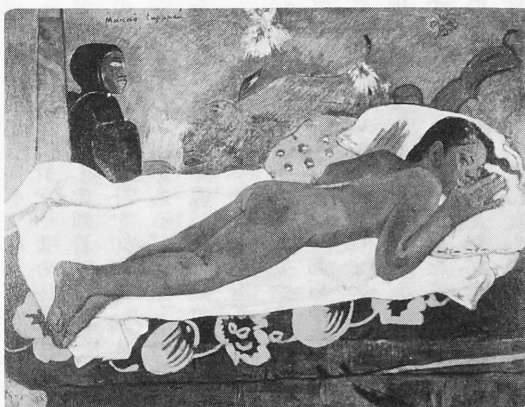


図5 ゴーギャン 死霊は見守る

作を描いたことを知っている。前景のベッドの上に裸体のマオリ族の少女が俯伏せになっていて、背景の柱の前に、横顔を見せた男女どちらかとも分らぬ不気味な老人が佇んでいる。これは、マリオ族が信じ、怖れている死者の亡霊のトゥパパウだ。ゴーギャンが或る晩おそくパーベテからマタイアのわが家に帰ってきて、灯の消えた暗闇の中で同棲していた少女テハmanaが、トゥパパウの恐怖におびえている姿を発見したことが、この画を描かせた動機となっている。

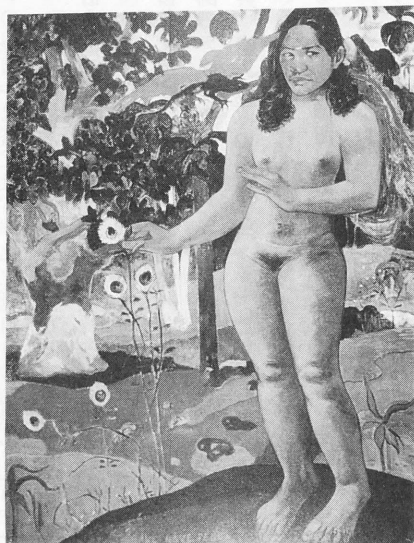


図6 ゴーギャン 歛ばしき大地

ところで『ロティの結婚』の中にも、トゥパパウについての記述がある。

「タヒチでは、夜の水浴びはなかなか怖い。月夜に少女らは三々五々森の中を、いい知れぬ冷たいそここの天然の鹽につかりに出かける。——そのとき、ただひとこと「トゥパパウ」という声が水浴の女たちのあいだになげこまれると、女たちは気でも触れたように慌てふためいて逃げるのである。……」（Toupapahuとは、あらゆるポリネシア人の恐怖のまとなっている、刺青をした幽霊どもの名前で、——これ自身がすでに恐ろしい、何とも翻訳できない奇怪な言葉である……）」

大原美術館蔵の「Te navelave founa」（歛ばしき大地）（一八九二）の、悪の花を摘もうとしているタヒチのイヴの肩のあたりに、真紅の翼を持つ蜥蜴に似た奇怪な動物が飛んでいる。ゴーギャン自身は、この動物については何一つ説明していないが、すでに蜥蜴だという説が定説化しており、一部の研究者は、『ロティの結婚』の以下のくだりをその根拠としている。¹³

「……ララフは少々憤慨したときは、私のことを肢の無い長蜥蜴と呼んだ。——最初私はこれが何のことか分らなかった。

蛇というものはポリネシアでは全然人の知らない動物だものだから、ララフを教育してくれた例のあいのこの先生は、この悪魔がどんな格好で最初の女を誘惑したかを説明するのに、この婉曲な表現の力を借りたのであった」

宣教師が「創世記」のエデンの園の話をする際、蛇を蜥蜴に変えて説明したとは、タヒチで一般に言われていたことなのかもしれない。しかしゴーギャンが『ロティの結婚』から得た知識を絵に活用した可能性は十分にある。

『ロティの結婚』の中には、ゴーギャンが最後に移住したマルキーズ群島のヒヴァオア島についての言及もある。

ポリネシア、とりわけマルキーズ群島では白髭はきわめて



図7 ロティのデッサン スクヒヴァ島の女王

珍しく、酋長たちの被りものや装飾の素材に使われる。ララの年とった養父は、年に二度自分の白髭を刈り、「これをマルキーズ群島の中で最も野蛮なヒヴァオアに送って」、生計を立てているのである。

ロティはこの小説の第二部の冒頭で、「枝葉の項」と但し書きをつけつつ、三つの節すべてをあてて、ヒヴァオア島の隣のスクヒヴァ島について語っているが、その中に「隣のヒヴァオア（或いはドミニック）島でいまだに盛んに行われている人肉嗜好は、スクヒヴァでは数年前から忘れられている」という個所がある。

ゴーギャンは、一九〇一年七月のシャルル・モーリス宛ての手紙の中で「なにはともあれ、来月最後の努力をしに、ま

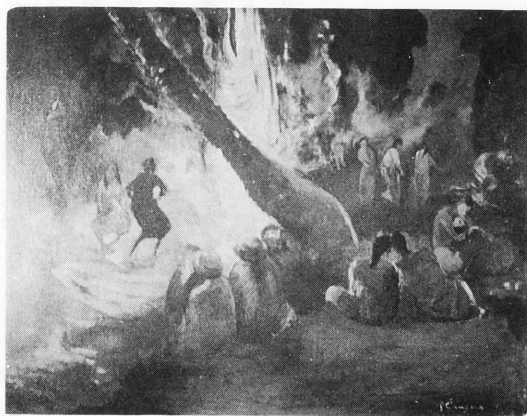


図8 ゴーギャン ウパ・ウパ

だ食人の行われているというマルキーズ群島のファトヒヴァ島に移住する」と書いている。¹⁴二月前にダニエル・ド・モンフレに書いた手紙には、今後の住所をヒヴァオア島としているので、ファトヒヴァはヒヴァオアの書き間違いであろう。¹⁵ともかくゴーギャンが一九〇一年九月にやってきた時、この島ではすでに食人の風習はすたれていた。だからゴーギャンのこの知識は、二十年前に出た『ロティの結婚』から、或いは得たものだったかもしれない。

こうして数え上げてゆくとときりがない。ゴーギャンには、「オヴィリ」(野蠻人)という題の有名な彫刻があるが、ラフは、遠く離れたボモトウス諸島生れの友達の少女を「オヴィリ!」と言って罵るのであり、燃え上がる篝火の側らで夜を徹して人々の踊る、ゴーギャンが描いた「Uba upa」(祭)の光景は、『ロティの結婚』のあちこちに見られるし、ヒメネスと呼ばれるマオリ族独特の聖歌のことも、『ロティの結婚』と『ノア・ノア』の双方で語られている。ラフは、この聖歌の欠かすことのできない歌い手なのだ。

「腐敗した」ヨーロッパを逃れ、「熱帯のアトリエ」を作るために南方へ赴こうとして、ゴーギャンは、最初トンキン、次いでマダガスカルを考え、最後にタヒチを選んだ。この選択にあずかって最も力大きかったのは、『ロティの結婚』だったとされる。そのことを明言しているのは、エミール・ベルナルだ。¹⁶

「彼は、私を連れてトンキンへゆく計画を立てていた。やがてこの方面では得るものがないと知って、彼はタヒチに決めた。タヒチについてのロティの本を読んだからだ」

実際、一八九〇年六月のものと推定されているベルナル宛てのゴーギャンの手紙には、ロティとタヒチについての言

及がある¹⁷。

「……マダガスカルでは、肉はただ同然で、狩猟の獲物も豊富だ。商人であつたり、途方もない贅沢を望むならば、実際には、思ったより生活に金がかかる。」

タヒチでも同じことだ。町にはイギリス人とフランス人その他もいる。ロティは、船を自由に使える、財産のある文学者として、こうしたものを見てきたのだ。パンの木とか、野生のバナナとか。しかしこうしたものはみな、どここの熱帯地方にもある。ココ椰子だとか……」

ロティがタヒチを訪れたのは、少尉に任官した翌々年、弱冠二十二歳の時であり、「船を自由に使える」人間などではなく、また死んだ父の借財を毎月給料から返し続けていた有様で、とても「財産のある」身分ではなかった。しかも当時は何ひとつ発表していなかったのだから、「文学者」とさえ言えなかった。ただ「首環のない狼である」¹⁸ ゴーギャンが、『ロティの結婚』に影響を受けながらも、身分の保障されている海軍士官のロティに、終始反感を抱いていたのはたしかである。

「彼(『セザンヌ』)は本を読まなかったロティのような人間ではない。彼は、ウェルギリウスを知っており、レンブラントとブッサンをよく理解していた」(『へば絵描きの駄法螺』)

「……われらが偉大なアカデミー会員ピエール・ロティが巧みに描いてみせた、ああいう小さな箱を思わせるものではない。

タヒチ女ララの妹であるあのお菊さんも、そこにはないだろう。彼女たちは二人とも、すでに倦み果て、腐敗した青年のお上品な心情など、理解できない」（『前後録』）

これらはいずれも、ゴーギャンがタヒチへ渡って以後の文章である。付け加えておくと、後者は日本について語った「七宝焼の壺」と題する一文の中のものだ。見られるように、ロティについて論じる時、ゴーギャンの唇にはいつも皮肉と侮蔑が浮かぶ。彼はロティを、「倦み果て、腐敗した」世紀末の西欧の文明人とみなしているのであり、それに対して、彼は自分を原始的な「インディアン」と位置付けているのである。そうした対比は、次のゴーギャンの言葉にはっきりあらわれている。

「タヒチのイヴは、天真ながら、とても鋭敏で、物事を心得ている。その子供のような眼の奥に宿る謎は、私には解けないままだ。これはもう、ピエール・ロティがギターをひきながら歌うきれいなロマンスに耳を傾けているきれいな少女ララではない（ピエール・ロティ自身もきれいなのだ）。これは、恥知らずでもないのに裸で

歩くことのできる、天地創造の第一日目のような動物的な美しさをそっくり残している、罪を犯したあとのイヴなのだ」（『偶感抄』¹⁹）

ただしゴーギャンが、タヒチを表現した人間として、たえずロティを意識し、ロティをライバル視していたことも確かである。

B・ダニエルソンは、さきに引用したベルナルの言葉にもかわらず、ゴーギャンにマダガスカルからタヒチへ行先の変更を求めたのは、『ロティの結婚』を読んで興奮したベルナル自身だとし、ゴーギャンの方は、『ロティの結婚』は小説だからあてにならない、と言ったとしている²⁰。

一方フランソワーズ・カシヤンは、ゴーギャンに『ロティの結婚』を読ませたのは、ゴッホだという説をとる。²¹ゴッホの手紙にはロティについての言及がしばしば見られ、彼が『お菊さん』をはじめ、『ロティの結婚』『氷島の漁夫』などを愛読していたのはまぎれもない。カシヤンは、ゴッホが末妹ウィレミーンに宛てた一八八三月の手紙の中の「たとえロティの『ロティの結婚』のようなものを、今日の画家が描くことは、当然想像できる」の一節から、翌年秋、アルルで共同生活を送った際、ゴッホが、「熱帯のアトリエ」の建設を夢みるゴーギャンにこの小説を読ませたにちがいない、と推測するのである。

ゴーギャンのタチヒ行に『ロティの結婚』が大きな役割を果たしたことは、ゴーギャンもまたエグゾティスムの風潮に動かされたことを証している。しかし一九〇三年、ヒヴァオア島において、植民地政府の横暴と擄取に対し、原住民の側に組して立ち上がったゴーギャンには、もはやエグゾティスムなど毛ほども残っていないかった。彼は、植民地に楽園などあり得ぬことを、身を以て知ったのであった。彼は、エグゾティスムの甘美な夢に誘われながら、その夢から覚醒せざるを得なかった過渡期の人間である。

「私がフランス植民地の生活にどれほど熱狂しているかは一寸いい表せない」

「もし旅行者に少しでも感受性があつて、絵のような風景だけに眼をむけるのでなく、住民の現実の生活条件にいくらかなりとも注意するなら、三つの島にみちみちている自然のすばらしさや、感嘆すべき人間的な光景にもかかわらず、しばしば彼は、悪夢のような印象を受けるはずである」

前者は一八八七年仏領西インド諸島の一つマルティニック島に滞在していたゴーギャンの妻宛ての手紙の一節であり、²³後者は同じ島を一九五〇年に訪れたミシェル・レリスの「マルティニック、ガドゥループ、ハイチ」という一文の中のものである。²⁴二つの言葉を隔てているのは、筆者の「感受性」

の有無などではなく、この半世紀における西欧の人々の意識の変化だ。原住民の生活条件に対し、ゴーギャンを盲目にしたのは、未知という観念であり、エグゾティスムであった。しかもこのレリス、ロティを「白痴」と罵ったシュルレアリスト・グループに属する彼をアフリカへ、西インド諸島へと赴かせたものの中にも、明らかにエグゾティスムは尾を曳いているのである。エグゾティスムは、西欧の人々にとりついた不治の病だ。

私たちは、エグゾティスムをただ断罪するだけでなく、それを想像力の面からもう一度見直す必要があるだろう。

註

1 『ノア・ノア』には、実は三種類の稿がある。ゴーギャン自身のオリジナル原稿①と、それに詩人シャルル・モリスが手を加えて、一九〇一年にラ・ブリューム社から兩名の著として刊行したもの②と、刊行前、ゴーギャン自身がその原稿を自らの手で写してタヒチへ持って帰り、さまざまな感想や挿絵を加えたもの③の三つである。①は一九六六年に至ってはじめて日の目を見、③は一九二四年にクレス社から刊行された。岩波文庫版は②、拙訳のみず書房『オヴィリ』所収のものは、①に拠っている。

2 ゴーギャン、ゴッホとロティの関係は本文中でとりあげるのを省略する。エグゾティスムにきわめて敏感だったルソーは、ロティの愛読者だったにちがいない。「ピエール・ロティ像」という

肖像画——異論もあるが——を残しており、ルーセルは文字通りの愛読者で、タチに立ち寄った際、摘んだ花を押花にして、ロテに送ったりしている。パリの国立図書館には、ロテがルーセルに本の寄贈その他について礼を述べた数枚の絵葉書が現存する。

3 一九二四年、ブルトンとはペンフレット「死骸」の中で、ロテ、バレス、フランスを「白痴、裏切者、いぬ」と言っている。

4 Christel Mouchard, *La reine des boucaniers*, Seuil, 1989 pp 102—137

5 Bruno Vercier, Loti, écrivain en son temps (Loti en son temps, colloque de Painpol, Presses Universitaires de Rennes, 1994 所収)

6 David Sweetman, Paul Gauguin — a complete life, Hodder and Stoughton, 1995. Jean Autret の訳が Les vies de Gauguin という題で、同年 Beldond 社から出ている。

7 海軍に残ったロテとロテの知識の差だ。Lesley Blanch, *Pierr Loti への思い出* 1983。

8 Lesley Blanch, *Pierre Loti, Portrait of an Escapist*, Collins 1983。

9 Lesley Blanch 前掲書

10 ロテは終生日記を続け続けた。その多くはまだ活字化されていない。刊行されているものは以下の通り。

Pierre Loti, *Journal intime* (tome I), 1878 — 1881, Calmann - Lévy, 1925

Pierre Loti, *Journal intime* (tome II), 1882 — 1885, Calmann

- Lévy, 1929

Journal intime de Pierre Loti à Tahiti, La Société des Etudes Océaniques, de Papeete. 1934

11 兄ギェスタヴ・ヴィオーについては次のような研究書がある。

Georges Taboulet, Jean-Claude Demariaux, *La vie dramatique de Gustave Viald, frère de Pierre Loti*, Les Editions du Scorpion 1961

12 Lesley Blanch 前掲書

13 一九八九年にグラン・パレで行われたゴーギャン展のカタログその他。

14 *Lettres de Gauguin à sa femme et ses amis*, Bernard Grasset, 1946 所収。ポール・ゴーギャン『タヒチからの手紙』岡谷訳、昭森社、一九六二参照。

15 *Lettres de Paul Gauguin à Georges-Daniel de Montfreid*, Crès, 1918。岡谷 前掲書。

16 *Lettres de Paul Gauguin à Emile Bernard*, 1888—1891 Pierre Gallier, 1964 の表紙のデザインを用いた『エルナルの未刊の手稿「L' aventure de ma vie」の中の言葉』

17 前掲書所収。

18 コーギャンの *Avant et Après* に出ている。

19 ハバの言葉だ。Daniel Guérin 譯 *Oviri, écrits d'un sauvage*, Gallimard, 1974 中のもの。岡谷監『オビリ』、ベネチエ書房、一九八〇参照。

20 Bengt Danielsson, *Gauguin à Tahiti et aux îles Marquises*,

- Les éditions du Pacifique, 1975。 中村三郎氏の訳が美術公論社
(一九八四)から出てゐる。
- 21 Françoise Cachin, Gauguin, le Livre de poche, 1968。
みすず書房、『フアン・ゴッホ書簡全集』第六巻、一九一七ペー
ジ参照。
- 23 Lettres de Gauguin à sa femme et ses amis 前掲書。
- 24 Michel Leiris, Martinique, Guadeloupe, Haïti, Les Temps
modernes誌、一九五〇年二月号。 シシエル・レリス著、岡谷訳『日
常生活の中の聖なるもの』思潮社、一九七二 参照。